

学位被授与者氏名	劉 志穎（りゅう しえい）
論文題目	離婚家庭の子どもの目に映る「祖父母との関わり」 —祖父母による養育支援の実情に注目して—
論文審査結果の要旨	本論の評価点は以下の通りである。第一に、家族社会学にて祖父母と孫との関係性に着目した点が挙げられる。従来の日本の家族社会学や家族史研究では、祖父母の役割は制度的枠組みや親側から論じられてきたが、子ども側の視点から祖父母との養育関係を実証的に把握しようとする研究は、いまだ発展途上にある。とりわけ離婚家庭に関する既存研究では、複雑な親子関係に焦点が当てられがちであったが、本論は離婚家庭における養育経験を通した孫と祖父母との関わりに着目した。 さらに、本論文は日本と中国という文化的近接性を有する東アジアの二カ国を比較対象とし、家族社会学の文献を横断的に精査することによって、日本社会における祖父母と孫の関係性を文脈化した。日本では祖父母の育児参加は依然として非干渉的であるとの認識が根強く、政策的または学術的関心が相対的に乏しい。他方、中国では隔世育児が伝統的な家族規範を流用し、現代家族政策において積極的に導入され、祖父母は家庭内外で明確な育児責任を負っていることが社会的にも広く認知されている。こうした比較家族社会学視座の導入は、本論の調査設計や考察の焦点を明確化するうえでも重要な意義を持つ。 最後に、調査から「孫＝子ども」自身の語りを通して祖父母の養育支援の実態を明らかにした。従来の制度論や親の立場中心の議論では捉えきれなかった、祖父母の存在が子どもの成長に及ぼす心理的・実践的な意味について、場合によっては同一の協力者に二度目の聞き取りを行うことで多面的に検証した。その結果、特定の条件下では祖父母との関係性が離婚家庭における子どもの健全な発達を支える重要な要因となることが示された。離婚家庭に関する社会的・政策的関心が高まる中で、祖父母を家族支援の対象に含めることの意義について探索的にではあれ実証的に提示した点も本研究の評価されるべき点である。 しかしながら、口頭審査にて本論におけるいくつかの課題が指摘された。初めに、本論では研究の目的＝問いが必ずしも明白ではなく、それぞれの箇所によって必ずしも一致しない研究目的が示されていた。このように研究の目的にばらつきがあり、調査内容の分析から何を明らかにしたかが不明瞭な点があった。これらの問いに対し、より多くの聞き取り調査の結果を導入した厚みのある考察についても課題が残った。 また、祖父母の経済力が孫のライフコースに与える影響を検証した階層論に基づく先行研究の整理が乏しいため、離婚家庭の子どもの養育における祖父母の影響に対する仮説的なモデルを明確にする取り組みが不十分な面も見られた。 2025年8月7日に、北九州市立大学北方キャンパス図書館ホールにおいて、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が修士(人間関係学)として十分な内容であると判定した。